あとがき

源氏物語の表現の典拠を探る、引歌研究の歴史は長い。『源氏釈』に見られるように、研究の出発はまず叙述の背後に存する和歌を白日のもとに引き出し、文脈の中で解釈しようとする営為から始まった。それ以後今日まで、多くの人々は引歌探しを重要な注釈作業の一環として持続してきた。その厖大な量の集積は、そのまま源氏物語研究の軌跡の重みに比例する。

引歌の指摘は、時代により、研究者の物語へのアプローチの方法により、また学統により、それぞれの注釈書で異なりをみせている。今日までに到達した研究水準という視点から、過去の引歌を選択して体系化することも一つの方法であろうが、私はむしろ指摘したすべてを取り出してみることにした。引歌の諸注集成を意図したのである。現在からは否定すべき指摘であっても、過去の研究者がどのような引歌を想念に描いて物語を解釈していったのか、その復元を私は試みたいのである。そこには、今日とはおよそかけ離れた発想による読みの方法が展開しているのを知るだろう。

また、源氏物語の古写本を調べていると、しばしば引歌の指摘だけをした伝本を見かける。これなども、いつの時代の注釈を反映した引歌なのか、本書のように集成していれば判断する手がかりを得ることができるだろう。ただそのためには、古注・新注を遺漏なく網羅する必要があるし、一つの注釈書でも諸本間の違いはどうするかなど、問題はまだ残されているが、すべて今後の課題としたい。

初めの見通しでは、もうすこし分量は少なくてすむだろうと思っていたが、原稿化してみると意外にも多くなってしまった。それをも厭わず快く出版をお引き受け下さった池田猛雄氏の御厚志、および何かとお世話をいただいた瑞原章氏に深謝申しあげたい。

昭和五十二年夏

編者識